



日本遺産
倉敷市

たてつき 楯築遺跡



楯築遺跡は、倉敷市矢部に所在する弥生時代後期（2世紀末頃）に造られた墳丘墓で、「王墓の丘史跡公園」として整備された一画に位置しています。

墳丘は、やや歪んだ円形を呈する円丘部と、その両側に長方形の張り出し（突出部）をもつ特異な形をしています。突出部の大部分は、昭和40年代に行われた住宅団地造成の際に破壊されました。消滅した突出部を含む全長は約80mと推定され、同時期の墳丘墓では全国でも最大級の大きさを誇ります。

昭和51年から平成元年にかけて、岡山大学考古学研究室が中心となって発掘調査を実施し、遺跡の全体像が明らかとなりました。

5個の巨大な立石がある円丘部からは、2基の埋葬施設が確認されました。中心主体となる埋葬は、円丘中央部に掘られた長さ約9mの巨大な墓壇を伴い、木棺の外側を木の板で囲んだ木棺木槨構造であることがわかりました。木棺内には、鉄剣1口と勾玉や管玉、ガラス製小玉などの玉類が副葬されていたほか、歯の小片2歯分も検出されました。また、木棺の底には、総重量32kgを越える大量の水銀朱が分厚く敷き詰められていました。もう一つの埋葬は、中心主体から南東方向へ約11m離れた地点で見つかりましたが、副葬品は皆無で、墓壇の大きさも長さ3mと、中心主体に比べてかなり小さなものでした。

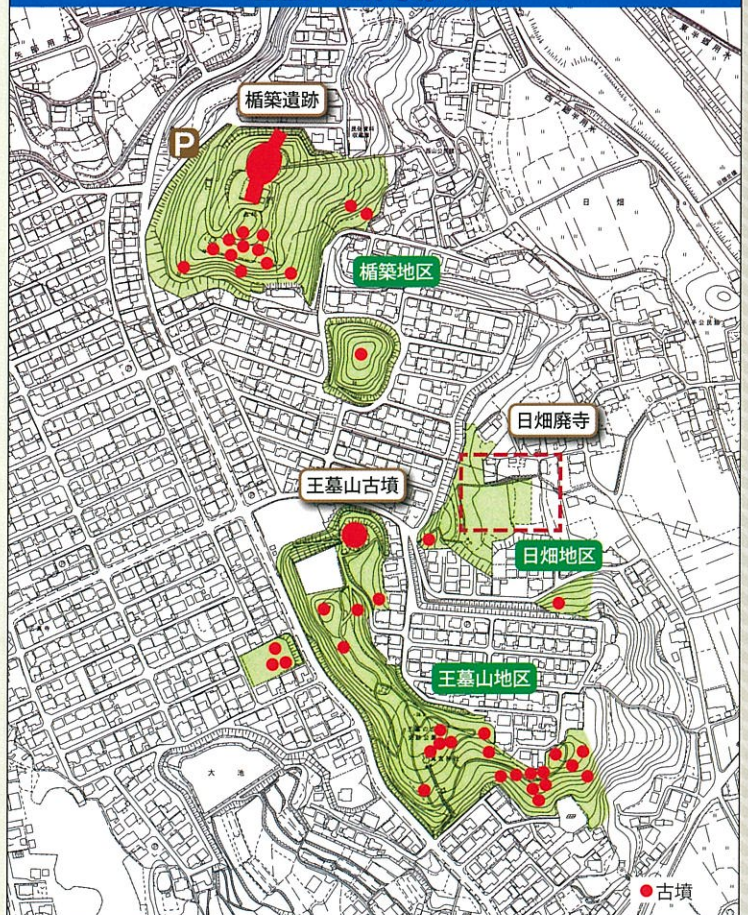
円丘部の中央付近、中心主体の上方にあたる位置には拳大の円礫が大量に堆積していました。その中から、特殊器台や特殊壺といった供献土器をはじめ、人形土製品や土製の玉類のほか、墳丘脇の収蔵庫に納められている旋帯文石（国指定重要文化財）と同様の文様を持つ小形の石（弧帯文石）などが出土しました。これらの遺物の多くは小さな破片となって見つかっており、埋葬後に行われたであろう祭祀儀礼に使用された後に意図的に破壊され、円礫とともに

墳丘上に置かれたものと思われます。

南西突出部の調査では、その先端が給水塔のフェンスの下に残存していることが明らかとなり、平らな面を外側にして立てられた列石が良好な状態で検出されました。また、突出部の前面（南側）には、墳丘を区画するため尾根を切断して掘られた大溝も確認されており、墳丘墓の造営がかなり大規模なものであったことがわかります。

楯築遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての墓制の変遷を考えるうえで重要な遺跡であるとして、昭和56年に国の史跡に指定されました。

王墓の丘史跡公園



① 中心主体と副葬品

埋葬のために掘られた墓壇は、長さ約9m・幅約6m・深さ約2mを測り、墳丘墓としては破格の大きさ。墓壇中央部には、木棺底部で確認された朱が鮮やかに見える。木棺跡の小口付近から手前に延びる石組みは暗渠状に造られた排水溝で、墳丘墓では珍しい。墓壇内に残る土手状の高まりは、土層観察用に残しているもの。

木棺本体は腐って残っていないが、残存する朱の痕跡から、長さ約2m、幅60cm(北西側)~70cm(南東側)のややいびつな箱形であったと推定された。

木棺は、板材を組み合わせた木槨で囲われていたことが、わずかに残っていた板材の痕跡などから明ら



木棺底部の副葬品出土状況



中心主体部の全容



検出された木棺・木槨跡

かとなった(木棺跡の外側に長方形に掘り込まれた部分が木槨の跡)。木槨は底が二重となる複雑な構造で、その大きさは、長さ約3.5m、幅約1.5mに復元された。



木棺内の副葬品

③ 南西突出部と大溝

給水塔のフェンスの下に、奇跡的に破壊を免れた南西突出部先端の列石が見える。列石は先端部の3か所で確認



南西突出部先端と大溝

され、上から見ると緩やかな弧を描いて立て並べられていた。列石は比較的平らな面を外に向け、石の間には小ぶりの礫を詰めて補強している。石材には全て花崗岩が用いられており、中央から端に向かって次第に石材が小さくなる傾向が見られた。

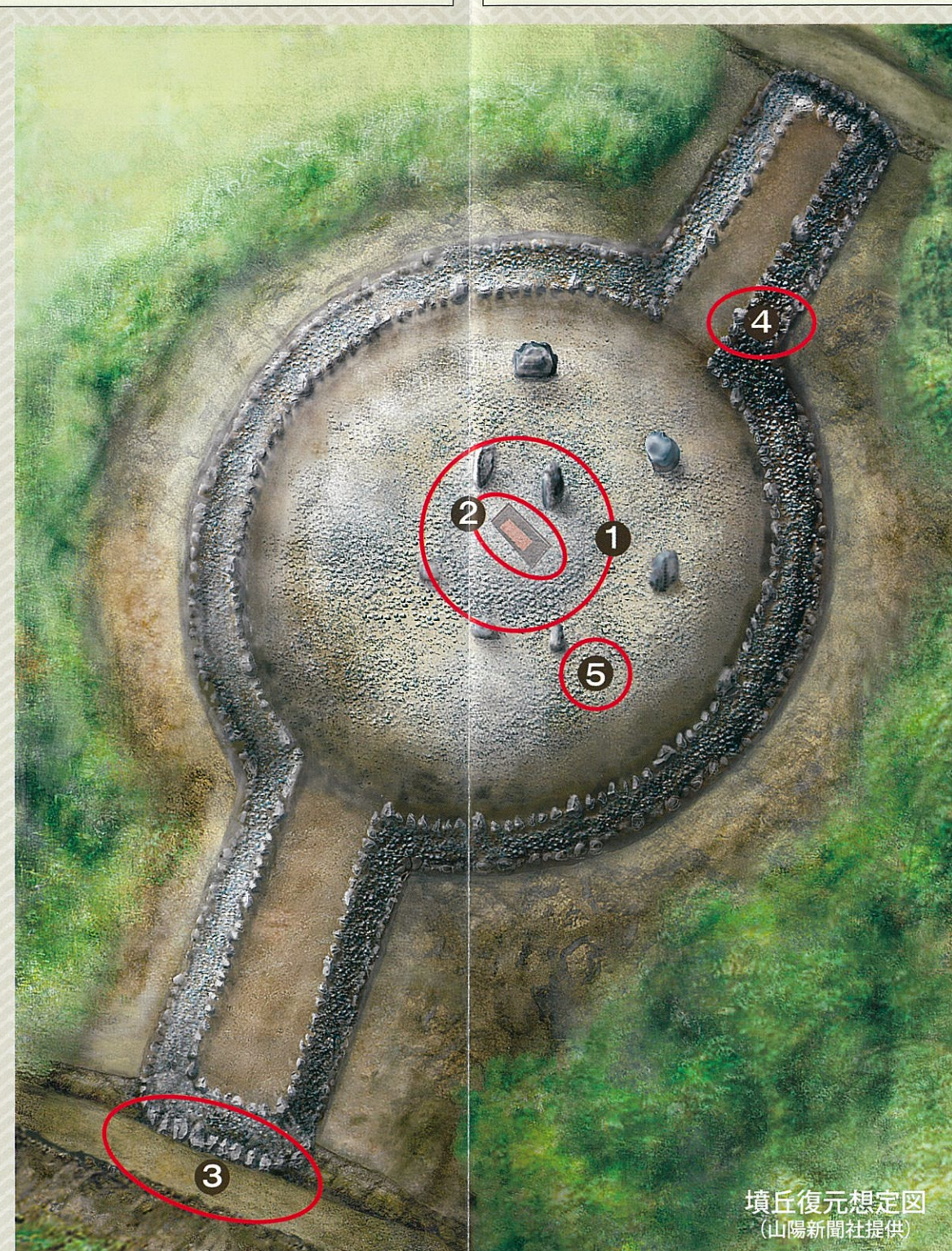
この列石の南側には、墳丘墓を尾根から画し突出部を形成するため、東西方向に大溝が掘られていた。その規模は、底部の幅約3.5~5m、深さは4m以上を測る大規模なものであった。



南西突出部の列石(西端)



南西突出部の列石(東端)



墳丘復元想定図
(山陽新聞社提供)

② 円礫堆と包含遺物

墳丘の広い範囲に拳大の円礫が散らばっていたが、特に円丘部中央付近では、おびただしい数の円礫が集中していた(円礫堆)。その範囲は、上面で5×3.5m程度で、厚さは1mにも達する部分があった。円礫堆の位置が、墓壇のほぼ中央にあたることから、もともとは墓壇を埋め戻した後に積まれていたものが、木棺や木槨の腐朽とともに墓壇内へ落ち込んだものと考えられる。

円礫堆の中には炭や灰、特殊器台や特殊壺をはじめとする土器類、人形や勾玉形などの土製品、ほかに鉄器や弧帯石など、数多くの遺物が含まれていた。



円礫堆の上面



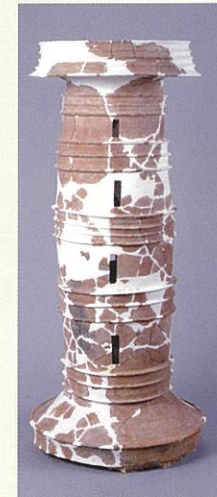
円礫堆の断面

中でも注目されたのは、旧橋築神社のご神体(旋帯文石)と同様の文様をもつ小形の石(弧帯文石)が出土したことであった。弧帯文石の表面には火を受けた形跡があり、結果、一つの核となる大きな本体と数百からなる小さな破片となって、円礫堆に包含されていた。

弧帯文石をはじめ、円礫堆内の遺物の多くは意図的に壊された状態で出土した。これらの遺物は、墳丘上で行われたであろう、亡き首長から新たな首長へと権力を継承する儀礼において使用(破壊)され、その後埋葬の中心部の位置に、円礫とともに積み上げられたと思われる。



人形土製品



特殊器台



弧帯文石
61×30×16 cm

④ 列石と円礫帯



上側の列石と円礫帯

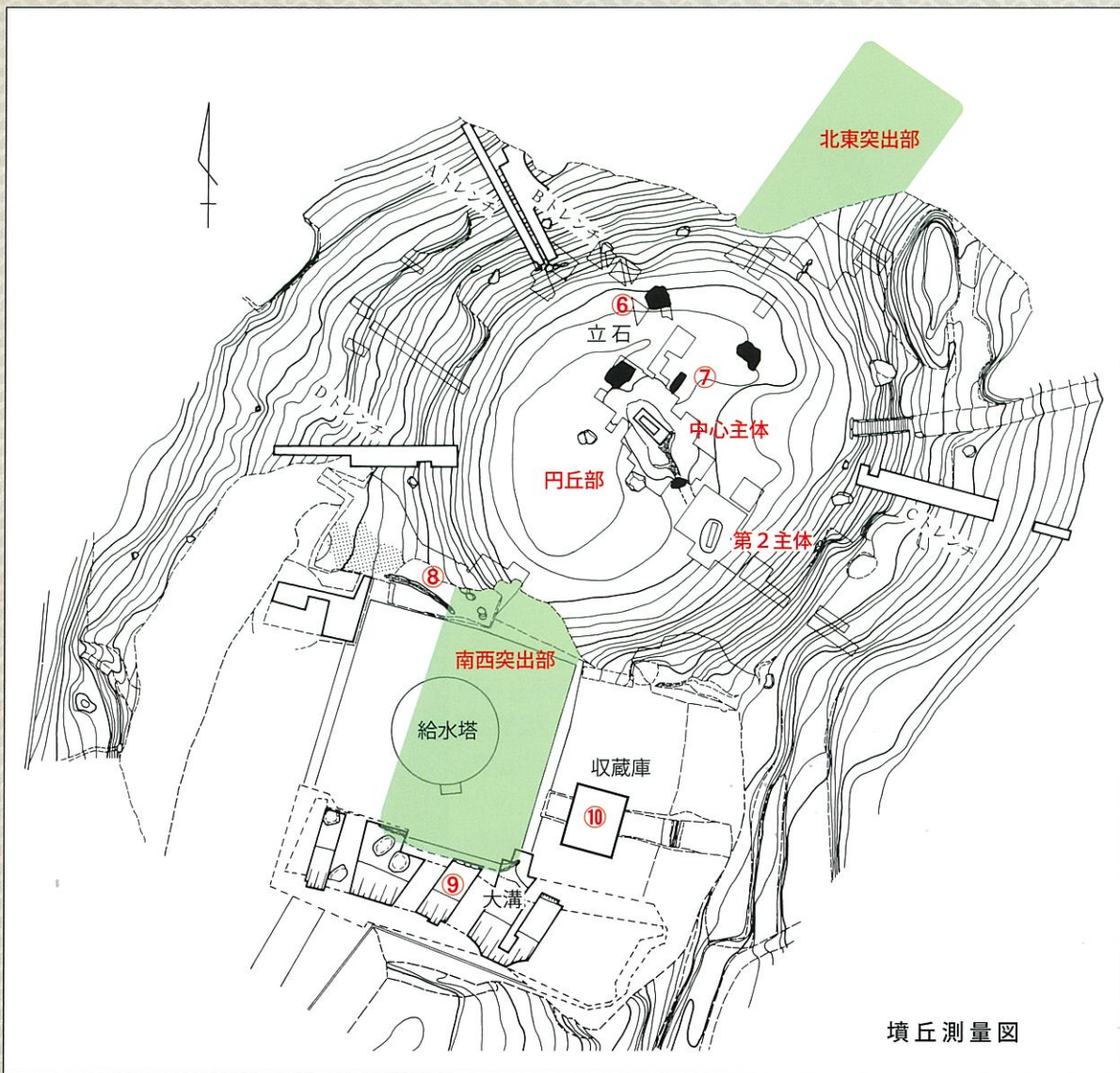
北東突出部が円丘部とつながるくびれ部付近では、2列の石列が確認され、その間を円礫で敷き詰めた状況(円礫帯)が明らかとなった。円丘部では、これに対応する下側の列石はほとんど残っていなかったが、上側の列石と円礫帯は一部で確認されており、もともとは墳丘全体を巡っていたと想定される。

⑤ 第2の埋葬



埋葬主体から南東へ11m程のところで、第2の埋葬が確認された。墓壇の大きさは、長さ約3m、幅約1.4m、深さ約1.2mで、底には木棺を設置するための粘土や角礫が認められたが、副葬品は皆無であった。

墓壇の規模や構造、副葬品の有無など、中心主体との差は歴然である。



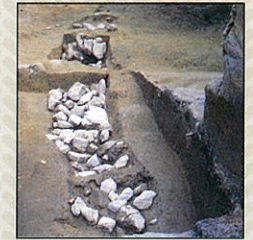
墳丘測量図



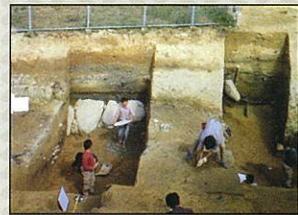
⑥円丘頂部の立石群



⑦旋帯文石が納められていた石の祠



⑧もうひとつの排水施設



⑨南西突出部先端の調査風景

⑩旋帯文石 - 伝世された弧帯文石 -

給水塔の隣にある収蔵庫に納められているこの石は、かつて榊築遺跡の上に建てられていた榊築神社の御神体で、円丘上に今も残る小さな石の祠に長らく安置されていた。石の大きさは、縦横約90cm・厚さ約35cmで、帯が円を描きながら複雑に絡み合う文様が全面に彫り込まれており、その様子は収蔵庫の窓越しに見ることができる。正面には顔と思われる表現が浮彫りにされており、地元では、別名「亀石(かめいし)」とも呼ばれている。この不思議な文様を持つ石は他に類例がなかったため、いつの時代のどういったものかについては長らく謎のままであった。しかし、榊築遺跡の発掘調査において、同様の文様をもつ小形の石(弧帯文石)が出土したことから、この御神体が、まぎれもなく榊築遺跡に関係する弥生時代のものであることが明らかとなった。

大きさこそ違うものの、特徴的な同じ文様を纏った旋帯文石と弧帯文石。一方は無傷のまま今日まで伝世され、もう一方は墳丘上で行われた祭祀儀礼により、数百からなる破片となった。榊築遺跡を造った当時の人々は、このふたつの石にどのような思いを込めていたのだろうか。二千年の時を遡り、興味は尽きない。



JAPAN HERITAGE

「桃太郎伝説」の生まれたまち おかやま
～古代吉備の遺産が誘う鬼退治の物語～



音声ガイド
Audio guide



35

日本遺産 桃太郎伝説
<https://momotaro-ura.jp/>



【編集・発行】

令和3年3月

倉敷市教育委員会 文化財保護課

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。